

# 書くことの再構成へと展開するカンファレンスの特徴

加藤 好広<sup>\*1</sup>・小林 一貴<sup>\*2</sup>・益子 典文<sup>\*2</sup>

高校1年生の国語総合の授業における書くことの学習過程を分析、考察した。授業はカンファレンスの方法を中心に構想した。カンファレンスを通して、学習者が問題を「当事者」として捉えることで独自の解釈や発想を生み出していくことに重点を置いた。カンファレンスと書かれたテキストの分析を通して、テキストの再構成という点から①カンファレンスの複数の内容・要素が意見文形成に影響を得ること。②意見文を書く行為自体が新たな書くことの着想や行為の契機になること。③当事者として問題を捉えることで、資料が示す『読みの道筋』からの分岐が行われること。④テキストを再構成する際に、カンファレンスの内容を取捨選択していることを明らかにした。テキストの再構成へと展開するカンファレンスの特徴として①拡散させた話題・内容を書く際に一つの方向に収斂させていくこと。②一つの方向に収斂させた内容が新たな発想の糧となること。③内容に関連・連想した語句から選択することを可能にすることを挙げた。また、書く行為が新たな着想が生み、書く内容の生成を促したり、書く内容を再構成したりする過程において「書き手意識」が生じることを明らかにした。

〈キーワード〉カンファレンス、表層／深層、拡散／収斂、書くことの再構成、書き手意識

## 1. はじめに

佐藤(2015)はカンファレンスの位置づけを「書き手が書きたい内容を明らかにし、どのように書いていくかを決定するために行われる対話や話し合い」を行い、「自立した『書き手』となるための『足場づくり』の場」として(1)。また、小林ら(2018)は物語創作でのペアカンファレンスを「学習者が自分の作り出したテキストをとらえ直し、書くことによって物語ることを意識化し、再構成する機会」としている(2)。

では、意見文(清書)を書く場合、学習者は下書きやカンファレンスの内容をどのように再構成しているのだろうか。本稿では意見文を再構成する際に影響を及ぼすカンファレンスのいくつかの特徴を具体的に指摘することを目的とする。

## 2. 授業の概要

カンファレンスにもとづく学習指導として、高校1年

生を対象に全5時間の単元を構成し実践を行った。授業者は第一著者である。授業では、2種類の文章を書くことを行った。一つはレポート1「資料を読んで考えた問題点」、もう一つはレポート2「自分自身がこれから身につけるべき力」である。それぞれについて下書きを書いた後にカンファレンスを行い、清書を書くことを行った。2つのレポートを書くこととカンファレンスとの流れの概略は以下のようになる。

レポート1「資料を読んで考えた問題点」(下書き)  
↓  
第1回カンファレンス  
↓  
レポート2「自分自身がこれから身につけるべき力」(下書き)  
↓  
第2回カンファレンス  
↓  
レポート1, レポート2の清書

授業の構成及び使用した資料(実用的な文章)(3)を以下に示す。

\*1 岐阜大学大学院教育学研究科カリキュラム開発コース

\*2 岐阜大学教育学部

1 時間目 資料の読み取り（1 回目）．資料を踏まえてレポート 1「資料を読んで考えた問題点」の下書きを書く．

2 時間目 第 1 回カンファレンス．レポート 1「資料を読んで考えた問題点」の下書きをもとに行う．

（カンファレンスの内容を参考にして、下書きを修正・加筆して清書を書くことを伝えた．）

3 時間目 資料の読み取り（2 回目）．資料を踏まえてレポート 2「自分自身がこれから身につけるべき力」の下書きを書く．

4 時間目 第 2 回カンファレンス．レポート 2「自分自身がこれから身につけるべき力」の下書きをもとに行う．

5 時間目 2 回のカンファレンス及び 2 つの下書きを参考にしながら、レポート 1「資料を読んで考えた問題点」とレポート 2「自分自身がこれから身につけるべき力」の清書を書く．

使用した 4 つ資料について、その内容を簡単に説明する．なお、詳しい授業構成及び資料、ガイドラインの内容については、加藤ら(2021)を参照されたい．

#### ア Society5.0 で実現する社会

これまでの社会と Society5.0 で実現する社会の違いがイラストを含めて説明されている．

#### イ 人工知能やロボット等による代替可能性が高い労働人口の割合

10～20 年後に、技術的には人工知能やロボットなどに代替される可能性が高い労働人口の割合を棒グラフで表している．対象となる国とその割合は日本（49%）、イギリス（35%）、アメリカ（47%）である．

#### ウ 人工知能（AI）の発達により、10～20 年後に消える仕事・残る仕事（予測）

人工知能(AI)の発達により、将来の就業構造が「消える職業・低賃金業務」と「消える業務」のように二極化することを具体的な職業を挙げて示している．前者には「物品の販売員」「銀行の窓口係」、後者では「内科医・外科医」「警察・刑事」「宿泊施設の支配人」などが挙げられている．

#### エ 遠藤薫『ロボットが家にやってきたら・・・人間と AI の未来』の抜粋（本書 p 27－30、33－34）

産業経済面からの AI やロボットに対するニーズ（「労働力不足の解消」「高度な技術を有する人材の必要性」

「人件費削減のニーズ」「新産業育成のニーズ」）とその理由を併せて記述している．

### 3. 研究の方法

#### 3.1 データの収集方法

5 つの班の机に IC レコーダーを置き、カンファレンスの内容の発話記録を作成した．音声記録された学習者の聞き取り可能な全発話に対して、教師・学習者の発話内容をテキストに文字起こしを行った．作成した発話記録には発話番号及び発話者を記載し、誰が、どの段階で、誰に対して発話したのかを記述できるようにした．

#### 3.2 トランスクリプトの記号について

用いる記号は以下の通りである．

[ 発話の重なり．音声为重なり始める時点を該当する 2 行にまたがる角括弧で示す．

= 途切れのない発話のつながり．直後の＝の後の発話につながっている．

空白 発話中の短い間．

, 「空白」よりもごく短い間．

. 陳述の区切り．

× 聞き取り不能．

h 笑い声

### 4. 「カンファレンス」と「書く行為」／「書く内容」

ここでは意見文を再構成する 4 つの事例の分析と考察、それに関わる 3 つのカンファレンスの特徴について述べていく．

1 つ目は、カンファレンスで得た複数の「知識や声の断片」が意見文の内容に影響を及ぼすことについて．2 つ目は、意見文を書くことを契機にして、新たな内容（書く内容）が生成されることについて．3 つ目は、書き手自身が「当事者」として問題を捉えることで、書く行為においても『読みの道筋』からの分岐が生じることについて．4 つ目は、意見文を書く時にカンファレンスで得た複数の「知識や声の断片」の取捨選択を行っていることについて．

#### 4.1 「当事者」と『読みの道筋』からの分岐」

初めに「当事者」と『読みの道筋』からの分岐」という2つの用語について述べておきたい。

「当事者（もしくは当事者の視点）」とは、問題や課題、話題としている「場」に身を置く者（の視点）、もしくはその問題に直面する者（の視点）である。つまり、設定した問題や課題、話題に対して他人事ではなく自らの問題（自分の事）として捉えたり、考えたりすること（視点）であると定義する。

次に「『読みの道筋』からの分岐」について。資料などを読む際に、最初は資料の特徴に従って読み進める（これを「読みの道筋」と称す）が、ある時点で読み手（もしくは「書き手」）が独自の解釈や意見をもつ、つまり資料の示す「読みの道筋」から離れ、「新たな読み」を生み出すことと定義する。

#### 4.2 書くことの再構成①～拡散と収斂～

Om が書いたレポート1「資料を読んで考えた問題点」の下書き及び清書をそれぞれ以下に引用する（引用部分は下書き及び清書の一部である。また、下線及び丸数字は引用者が施した。以下同じ）。

Om レポート1（下書き）

受付係などの接客業は人間が良い。  
AI が故障したとき手に負えなくなってしまう可能性が高くなることが問題だと考える。

Om レポート1（清書）

伝統産業や受付係などの接客業は人間が良いと思いました。伝統産業は人間だからこそ素敵な物が出来るし、感動できると思うからです。また、受付係などの接客業は何かトラブルが起きた時に素早く対応できないと思うからです。

レポート1の下書きには「受付係などの接客業は人間が良い」と書いてあり、清書を書く際に下線部の「伝統産業」や「素敵」「感動」などの評価についての記述を新たに加えている。新たな記述を加えた理由を検討するため、Om のグループの第1回カンファレンス記録を引用する（カンファレンス内の下線、丸数字は引用者による。以下同じ）。

259.Hs 「手縫いの仕立て屋」、ロボットがやったら

手縫いじゃねーhhh

260.Om 確かに hhh

261.Hs 手縫いの良さ消えるどうしたって、

262.Om 温もりねーよみたいね。

資料ウ「人工知能（AI）の発達により、10～20年後に消える仕事・残る仕事（予測）」の「消える業務」の項目の中に「手縫いの仕立て屋」が分類されていることに対して、261.Hs「手縫いの良さ消える」や262.Om「温もりねーよ」と発話をしている。加藤ら(2021)では、このように「当事者」として資料を解釈すること（発話すること）を「批判的な考察を行う態度・もしくは視点」と指摘した<sup>(4)</sup>。ここからうかがえることは、ロボットや機械が製造した量産品では「良さ」や「温もり」が消えてしまうという考えである。言い換えれば、人が手で縫うという行為によって商品に「良さ」や「温もり」が生まれるという発想である。また、同じ時間のカンファレンスにおいて、以下のような応答がある。

386.Om しかもさー正直さーそのアニメとかもさー日本人の文化やん。ロボットが描いてみってなるやん。描けないよ。だって絵でも個性出るやん。それすらも無くなったら終わるよ。

387.Hs ロボットにワンピースが描けるんですかー。ロボットにドラゴンボールが描けるんですかー。無理です。

388.Om うん hhh 無理無理

Om と Hs の発話の応答において、386.Om ではアニメを「日本人の文化」とし、人間が描くことで「個性」が現れると発話している。この発話を受けて387.Hsでは、具体的な名称を挙げながらロボットでは「個性」のある作品を描くことはできないと発話している。

この引用した2つのカンファレンスの内容が、Om の「下書き」から「清書」へ移行する際に記述内容の変容を促したのではないだろうか。もう少し詳しく清書の記述内容を分析しよう。清書のみ書かれている「伝統産業」は、「日本人の文化」（386.Om）から着想を得たものだろう。また、「個性」（386.Om）という言葉は清書には現れないが、人間とロボットの明確な差異を表す「人間だからこそ」という強意の助詞を伴う清書の記述に影響を

与えたと考えられる。そして、人が手で縫うという行為によって商品に「良さ」(261.Hs)や「温もり」(262.Om)が生まれるという発想と清書の「人間だからこそ素敵な物が出来上がるし、感動できると思う」という記述が対応していることから、両者に影響関係が認められる。つまり、Om は第1回カンファレンスの内容から着想を得て、「伝統産業は人間だからこそ素敵な物が出来上がる」ったり、「感動でき」たりするという考えに至ったと言える。

Om のレポート1 (清書)とカンファレンスの比較から、カンファレンスでの発話が意見文の内容、つまり「書く内容」に影響を与えていると言える。ただし、その影響は直接的なものではない。レポート1 (清書)を書く段階で言葉を言い換えたり、時間や話題を隔てた内容を組み合わせたりしているのである。カンファレンスにおいて発話された言葉や声が絡み合ったり、結合したりして「清書」の記述に現れてくると言える。図式化すると図1のようになる。

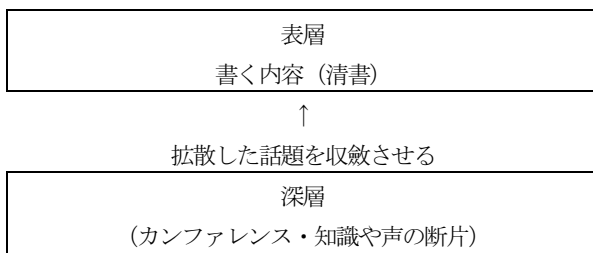


図1 話題の拡散と収斂

ここから分かるカンファレンスの特徴を述べておきたい。「批判的な考察を行う視点・態度」を用いながら「手縫い」の「良さ」や「温もり」に関する発話を行い、その後「日本人の文化」や「個性」、特定のアニメなどに話題を広げて行く。まさに、心にうつりゆくままに話題が拡散していくのである。この拡散したカンファレンスの内容や言葉、声は「知識や声の断片」として一度深層に潜っていく。そして、清書を書く段階になって、書き手の想いや考えを含めた意見文や作文として表出されるのである。書き手はカンファレンスで書く拡散した話題（深層に潜んでいる「知識や声の断片」）を絡み合わせたり、結合したりして、一定の方向（話題）へと収斂させていくのである。また、付け加えるならば、「カンファレンス」という場は「知識や声の断片」を広く、深く刈り取る場と言えるだろう。

#### 4.3 「書く行為」による生成①～カンファレンスの内容に新たな着想を加える～

次に生徒の学習過程に沿ってテキストの再構築とそれに関わるカンファレンスの特徴を確認したい。内容は、レポート2「自分自身がこれから身につけるべき力」についてである。

最初に3時間目に書いた下書きの一部を引用する。

Om レポート2（下書き）

AIが発達して、コミュニケーションする必要がなくなってしまうと就職活動をするときにコミュ障が悪化して大変なことになってしまう。

↓

今のうちにたくさんの人とコミュニケーションを取り、コミュニケーション能力を高める。

この下書きをもとにして4時間目に2回目のカンファレンスを行っている。以下にテキストの再構築に関連する箇所を引用する。

- 6.Hs 身につけるべき能力 やっぱコミュ力じゃない？
- 7.Om だよー
- 8.Nk 大事だよー
- 9.Om 大事
- 10.Hs でも、ロボット化、ロボット化していくと店員と話さなくていいからさ、コミュ障は助かるけどさ、コミュ力が落ちちゃったらどうしても困る×××
- 11.Om そう、コミュ障がもっとコミュ障になる、深刻化するんだっていう話  
(中略)
- 17.Nk AIやロボットが発達するため、機械に関する能力が必要
- 18.Hs まー機械に関する能力は必要だよー
- 19.Om うん  
(中略)
- 48.Hs この先AIが発達して、AIが発達したらインターネットが世界各国ってなるっしょ。
- 49.Om うんうん
- 50.Hs なんだっけあれ、グローバル化
- 51.Om 英語力ね
- 52.Hs そうそうそう 英語 少なくとも英語 まま喋れた方がいいかなって

### 53.Om うん

自分自身が身につける能力として挙げられているものが、「コミュ力」(6.Hs)つまりコミュニケーション能力、「機械に関する能力」(17.Nk)、英語力(51.Om)の3点である。これらについては、先ほど引用したレポ

- ・英語(グローバル化に伴う)
- ・通訳が必要
- ・機械音痴(ママ)は不利(きつい)

ート2(下書き)の続きに箇条書きで書き加えられている。

最後に第2回カンファレンス内容を受けて書いたレポート2(清書)を引用する。

#### Om レポート2(清書)

私がこれから身につけるべき力はコミュニケーション能力だと思います。その理由としては、AIが発達して、コミュニケーションする必要がなくなってしまうと就職活動をするときにコミュニケーション力が低下して大変なことになってしまうと思ったからです。(中略1)また、英語力、コンピューターの技術力も必要だと思います。英語力はこれからグローバル化がすごく進むと思うからです。(中略2)AIを発達させるにあたって私達はより高度で多くの力を身につけなければいけません。こういうことが必要になってくると、子どもの教育内容もがらりと変わる可能性もあるのかなと思いました。AIの発達に伴って、人間の格差もでてくるのではないかと私は思っています。

レポート2(下書き)とレポート2(清書)の内容を比較すると下書きの内容を踏襲しつつ、カンファレンスの内容を取り込んでいる記述もあることがわかる。「コミュニケーション能力」は下書きの内容を踏襲し、「英語力」は第2回カンファレンスの「英語力」(51.Om)「英語」(52.Hs)を受けた記述と言える。

では、「子どもの教育内容」や「人間の格差」についてはどうであろうか。Omのレポート2(清書)の「(中略2)」以降の内容では、AIの発達によって「より高度で多くの力を身につける」必要性に迫られ、そのことで生じる問題点として「子どもの教育内容」と「人間の格差」が挙げられている。カンファレンスでは「コミュニケーション能力」「機械に関する能力」「英語力」の必要性について

は述べているが、AIの発達に対応するための「教育内容」やそこから生まれる「格差」についての発話はなされていない。また、レポート2(下書き)及びカンファレンス後にレポート2(下書き)に書き加えられた内容(箇条書き)には「子どもの教育内容」や「人間の格差」という記述はない。つまり、「子どもの教育内容」と「人間の格差」はOm自身が考えた内容と言える。そのことを確認するために、同じグループのNkのレポート2(清書)を以下に引用する。

#### Nk レポート2(清書)

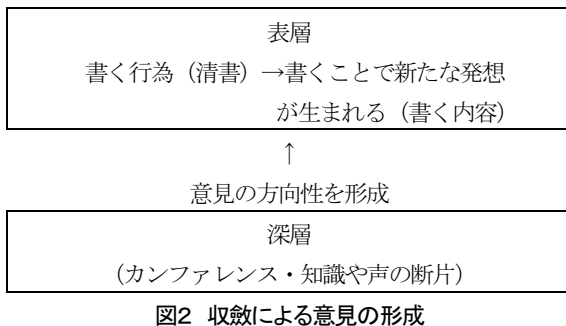
グローバル化が発達するため英語の力が必要だと思います。AI化が発達してひきこもる人が増えコミュニケーション能力がおとろえるため、今後とても必要な能力だと思います。

Nk, Omとも、記述の長短や語句の異同はあるものの、「コミュニケーション能力」と「英語力」について書かれている点は共通している。しかし、「(中略2)」以降の「子どもの教育内容」と「人間の格差」についてはOmの清書にしか書かれていないことから、Om独自の発想であると言える。そしてこれらの内容もしくは発想を得たのは、資料を読み、レポート2(下書き)を書いている時や第2回カンファレンスの途中には表れていないことから、レポート2(清書)を書く段階であったと考えられる。

OmはAIの発達により「コミュニケーション能力」や「英語力」の必要性が高まってくることまでは下書きを見たり、カンファレンスの内容を振り返ったりして書いたのだろう。そしてその記述の内容(Omの清書では「中略2」まで)を契機にして、AIの発達による変化や社会問題、つまり「子どもの教育内容」と「人間の格差」へと発想が展開したのではないだろうか。

ここで再度、カンファレンスの特徴を述べておきたい。Omのレポート2(下書き)とレポート2(清書)を比較すると、内容の異同の多さが確認できる。そして、その要因の一端にカンファレンスがあることは、レポート2(下書き)への書き込みからもうかがえる。カンファレンスは発話を繰り返す中で関連する内容(知識や声の断片)を新たに加えることができる「場」だと言える。また、「場」を共有することは同時に新たに加えられた内容(知識や声の断片)を共有したり、意見を同一(類似)のものにしたりする。

しかし、カンファレンスにおいて意見の方向性が定まったから書くことが完結するわけではない。下書きやカンファレンスの途中で書き留めた内容を右から左へと書写したり、一定の方向性に従って内容をまとめたりするだけではなく、「書く行為」の過程で新たな着想・発想が促され、さらに書き進められるのである。そして、その源泉、書き進める契機となるものがカンファレンスで形成された意見の方向性ではないだろうか。つまり、カンファレンスの過程で内容や発想を新たに加えながら意見の方向を形成し、それを基盤にした書く行為によって、さらに新たな「書く内容」（書き手の独自の発想）が生成させるのである。このことを図式化すると図2のようになる。



#### 4.4 「書く行為」による生成②～視点の移動～

加藤ら(2021)において、資料を基にしたカンファレンスの過程で得た着想を持ちつつ、観点を資料から「幅広い話題・抽象的な話題」へと移動する視点について述べた。この節では、移動する視点がカンファレンスの過程だけではなく、「書く行為」の中にも生じることを確認したい。

最初に Sm の書いたレポート1「資料を読んで考えた問題点」の清書を以下に引用する。

Sm レポート1（清書）

（前略）ですが、10年～20年後になると、①第三次産業の職業のほとんどが人工知能やロボット等に代替されると考えます。こういった事から②失業者の再就職が出来ないということになると考え、このことから発生するであろう問題は③「収入源がなくなる」→こ<sup>ママ</sup>独死が増えるのではないかと考えます。そのため④10年～20年後になにも対策をしないまま人工知能・ロボット等が発展し続けると、10年～20年後の社会問題は「自殺」ではないかと考えました。

Sm の清書で着目したい点は、下線を施した4点である。

第1回カンファレンスの内容から着想を得たと考えられる箇所と独自に発想したと考えられる箇所の分けをするために、以下に第1回カンファレンスを引用する（Sm は他の三人のカンファレンスの内容を聞く側に回ることが多く見られた）。

148.On おれらはじゃあこのAIやロボットの

149.Iy 発達によって

150.On つまり これについて語る 今、人間の仕事  
がロボットとかで奪われつつあるみたいなこ  
と

151.Iy うん それはえらいことではないですか

152.On だからおれはプログラマー  
×××

153.Iy 何かありますか？

154.Nt 僕つか？ 疑問でいいんだよね？ 失業者  
はどうなってしまうのでしょうか？

155.Iy 失業してそれからバイバイ

156.Nt hhh

157.On 自殺かニート

158.Nt というところが問題じゃないですか？

Sm がレポート1（清書）に書いた「第三次産業の職業のほとんどが人工知能やロボット等に代替される」（下線部①）ために「失業者の再就職が出来ない」（下線部②）という記述は、カンファレンスの「人間の仕事がロボットとかで奪われつつある」（150.On）ため、「失業者」（154.Nt）になる、もしくは「失業」する（155.Iy）という発話に対応している。また、従来の労働現場（労働環境）にロボットやAIが導入されることで仕事の幅が広がるが、その恩恵をすべての労働者が受けるわけではなく、失業を余儀なくされる人も出てくることが引用したカンファレンスの前に発話されている<sup>6)</sup>。このことを踏まえると、Sm の「書く行為」は、「4.3 「書く行為」による生成①」で述べたように、「人工知能やロボット等に代替される」ことによって「収入減、孤独死」（Sm の清書では③「収入源がなくなる」→こ<sup>ママ</sup>独死が増える）という新たな「書く内容」の生成の連鎖が促されたと考えられる。

しかし、Sm のレポート1（清書）の特徴はそれだけではない。着目したい点は、資料やカンファレンスの内容を

踏まえて、そこから得た知識や情報、自分の理解をもとにして新たな問題点を述べている箇所である。それが、レポート1（清書）の④「そのため10年～20年後になにも対策をしないまま人工知能・ロボット等が発展し続けると、10年～20年後の社会問題は「自殺」ではないかと考えました」という記述である。これはロボットやAIが人間の仕事を代替することで労働・職業先が限定され（もしくは奪われ）、その結果として失業する（もしくは失業者が増加する）という記述の流れに基づき、「10年～20年後の社会問題」という将来の予測を述べるものである。資料には、ロボットやAIの発達に起因する社会問題についての記述はない。このことから、これは「書く行為」における「幅広い話題・抽象的な話題」へと視点が移動したものであると言える。

Smが清書を書く時点で捉えた「問題点」は、最初は資料が示す「読みの道筋」⑥に沿ったものであるが、途中（傍線部④以降）から「『読みの道筋』からの分岐」⑦をしているのである。これは、ロボットやAIの導入により労働環境が変化するその場に身を置く「当事者」として、10年20年後の未来を生きていく者の眼差しでこの「問題点」という語句を捉え直したのではないだろうか。批判を恐れずに言うならば、Smは「書く行為」の過程において資料から読み取った問題を、カンファレンスを行う現在から社会が今後抱えるだろう問題へと変換し、教室の外へ移動させたと言える。その契機となるのが「当事者の視点」であり、それが「『読みの道筋』からの分岐」を促し、「新たな読み」を生み出すことにつながるのである。

Smのレポート1（清書）にはもう1つ着目したい点がある。それは、「10年～20年後の社会問題は『自殺』」という記述である。先に引用した第1回カンファレンス記録において「自殺」という言葉は「157.On 自殺かニート」と発話されており、Smが新たに発想したものではない。ここで問題としたいことは、AIやロボットに仕事を奪われたことに対する行動として挙げられているのは、「自殺」以外にも「プログラマー」（152.On）や「ニート」（157.On）があるということである。つまり、カンファレンスの中に「自殺」や「ニート」、「プログラマー」の3つの候補が出てきており、その中から「自殺」という言葉を選択したのである。そして「自殺」という言葉を「10年～20年後の社会問題」とつなげていくのである。

このようにカンファレンスで発話された言葉を、清書を書く際に「選択する行為」については他のグループにおいても見られるため、次にそのことを検討したい。

#### 4.5 書くことの再構成②～取捨選択～

先ほど、カンファレンスで発話された言葉を清書を書く際の「選択する行為」について述べた。ここではカンファレンスが清書を「書く行為」へ与える影響を「選択する」という点から検討したい。

最初にNsのレポート2（下書き）を引用する。

Ns レポート2（下書き）

自分がこれからの社会で持たなければならない力は、①対応する力だと思います。これからの社会は、②知識能力の高いロボットが主な働き手になっていくと思います。なので人手がいらなくなってしまう失業者が増えたりします。なので③ロボットのできない仕事(命に関わる仕事・コーチ)をやるしかありません。そこで対応する力がつかわれると思います。

以下にNs, Ks, Sh, Tkのグループの第2回カンファレンス記録を引用する。Nsの「中略」までの発話はNsのレポート2（下書き）をもとにしているため、ほぼ同じ内容である。

- 1.Ns 私がやっぱ自分自身がこれから身につける、身につけるべき力は、それはですね、僕はこれから人工知能が発達していく社会で、必要な力(能力)は自分で考え、行動することだと思いますね。
- 2.Ks たとえだ、あああ
- 3.Sh 終わってから
- 4.Ns で、で、人工知能(AI)は設定されたことをやるだけで、自分で考え行動に移すことができないですね。ま、それと同時に日本人にはおもてなしといういい文化というものがあるじゃないですか。それが、人工知能AIにはできないので、んー×××人工知能にはやっぱ一おもてなしとか、×××
- 5.Ns 聞けー
- 6.Ns おもてなしとか考えてやることができないですね。で、自分で考え行動することが人間が勝ってる、勝ってる点なので、まー、それがこれから

のあれで一仕事、まー減っていくけど、重要なことですね。

(中略)

- 14.Sh たとおもてなしとはどうゆう  
15.Ns そうそうそう  
16.Sh どうやっておもてなしを  
17.Ns あれやん なんか。具体例は旅館とかね  
18.Ks おうおうおう  
19.Ns あれやんか、お客さんが来るわけじゃないですか。  
20.Ks ほうほうほう  
21.Ns ロボットだけだと、ロボットだと布団敷くだけとかそういう感じない。  
22.Ks ああああ  
23.Ns でも、日本人はキレーにパンパンにする、そういうことです。  
24.Tk そう言うことかー  
25.Ks それってさー、対人関係なくねー  
26.Sh 自分で考えることにおもてなしってあるの？  
27.Ks しゃっべてなくねー  
28.Ns おもてなしは自分で考えてこうした方がお客さんが喜ぶっておもてなしじゃん  
29.Tk 業務じゃない？  
30.Tk セヤ  
31.Ns 何？  
32.Tk 仕事の一環じゃない？それは  
33.Ks 別にロボットでもさー、何なら逆に正直ロボットの方がきれいだよ。  
34.Tk 気づかいとかだよ。気づかいとか。

1.Ns で自分自身がこれから身につけるべき力を「自分で考え、行動すること」、4.Ns で人間が人工智能に勝っている点を「自分で考え行動すること」と発話し、その例として「おもてなし」(6.Ns)を挙げている。「中略」以降ではおもてなしの内容の捉え方に話題が移り、Tk は「おもてなし」について「業務」(29.Tk)としていたが、その後「気づかい」(34.Tk)と発話し直している(33.Ks「ロボットの方がきれい」という発話に対する反対意見であるとも考えられる)。

レポート2(下書き)の①「対応する力」をカンファレンスでは「自分で考え、行動すること」(1.Ns)「自分で考え行動に移すこと」(4.Ns)と発話している。また、下書きの③「ロボットのできない仕事(命に関わる仕事・コ

ーチ)」はカンファレンスにはなく、代わりに人工知能やAIでは代替困難な「おもてなし」(6.Ns)について発話している。

では、カンファレンスを経て清書はどのように再構成されたのか。以下にNsのレポート2(清書)を以下に引用する。

#### Ns レポート2(清書)

自分がこれから社会で持たなければならない力は、①対応する力だと思います。これからの社会は②知識能力が人間より高いロボットが主な働き手になっていくと思います。なので人手がいらなくなってしまい失業者やニートが増えたりします。ロボットができる仕事は、確かに多いかもしれませんが③感情がないとできない接客や逆に④ロボットを直す職業がほしくなってきました。この先、⑤人間とロボットが共存していくためには、ロボットが主な働き手となり人間がロボットを後ろから支えることで社会が発展していくと思いました。また、外国の人が来る時⑥おもてなしをしますがロボットだとかたくなるってしてしまいますが⑦人間だと優しくもてなしてくれるのでそこがロボットと⑧人間の差だと思います。

レポート2(下書き)とレポート2(清書)を比較すると、記述量の長さもさることながら、新しく書かれた言葉が散見される。前から確認すると、下書きの①「対応する力」は清書でも使用されている。また②も言葉の追加は多少あるものの内容に異同は見られない。清書の⑥「おもてなし」は先ほど引用したカンファレンスにおいてNs自身の発話(6.Ns)に出てきた言葉であるため、下書きには書かれていない言葉ではあるが、新しく出てきた言葉とは言えない。また、下書きについて言えば、③「ロボットのできない仕事」は下書きにはあるがカンファレンスで発話をしなかった言葉であるため、Nsが使用(採用)しなかったと考えられる。清書の⑦「人間だと優しくもてなしてくれる」及び清書の⑧「ロボットと人間の差」は、「ロボットだと布団敷くだけ」(21.Ns)や「こうした方がお客さんが喜ぶ」(28.Ns)という発話が影響していると言える。しかし、レポート2(清書)の③「感情がないとできない接客」や④「ロボットを直す職業」、⑤「人間とロボットが共存していく」は、レポート2(下書き)や引用したカンファレンス(Nsが「話し手」として発表し



た箇所)には現れなかった言葉である。では、これらの言葉は「4.3「書く行為」による生成①」で述べた、書くことで新たな「書く内容」の生成が促されると同じ原理であろうか。答えは否である。新たな「書く内容」の生成を促したものの正体は「カンファレンス」である。しかし、それはNsが「話し手」となった箇所ではなく、「聞き手」となった箇所の「カンファレンス」である。

まずはレポート2(清書)の⑤「人間とロボットが共存していく」から確認していきたい。この言葉はTkが「話し手」として発表している際に現れた言葉である。カンファレンスの該当箇所を以下に引用する。

104.Tk ロボットに支配されると、人の働く場所がなくなる。まーみんなと同じだね。ね、だから、ロボットができないような対人関係に携わる業務や資格や立案を残していった、んー人間とロボットと一緒に仕事ができるような社会にしていけば、人間の働く場所がね、ちょっとずつ増えていくと

105.Ks 共存って感じ？

106.Tk 共存だね それが一番ふさわしい

104.Tk「人間とロボットと一緒に仕事ができるような社会」は、105.Ks「共存」と言い直され、話し手のTkも106.Tk「共存だね それが一番ふさわしい」と賛同している。この「共存」という言葉は聞き手であったNsが、清書を書く際にカンファレンスの中から選び取り、自身の意見として取り入れた言葉だと言える。また、清書の③「感情がないとできない接客」や④「ロボットを直す職業」も同じ行為によるものである。先と同じくカンファレンスの該当箇所を引用する。

248.ks おーえっと、俺の考えは、AIやロボット技術の発達によって力仕事やレジ系、運搬の仕事がなくなって、からあの、AIはさー、いちから何もすることができないで、なんか、組み立てて、たとえば小説とか、小説、映画製作、えっとドラマ制作などなどの制作が無理だから

249.Sh フリーズしてますよー

250.Ks え ロボットとかに ロボットとかに、だから任せきれない対人系、えっと教師や

251.Sh たとえば

252.Ks 教師とかの、教師、カウンセラー、看護師、心理学者などの人の感情を汲み取って、それで、命の関わる仕事、医療、警察などの ことを任せきれないから ロボット それで そういう仕事に就いて、自分の力でやってくか 自分の力で、あの一仕事していくか それともえーロボットやAIの補助に徹して、メンテナンスやエンジニア、えープログラマーなどのあの一AIをさ、支援する方の仕事をするか、そのどちらかの能力を身につけないといけない。ということです。

252.Ksでは「人の感情を汲み取る仕事として教師やカウンセラー、看護師などを、また「AIの補助」や「支援する」仕事としてエンジニアやプログラマーを挙げられている。このカンファレンスの内容を受けて、Nsの清書では③「感情がないとできない接客」と④「ロボットを直す職業」と書いたと考えられる。これもカンファレンスの中から「発話や声の断片」を選び取り、自身の意見として取り入れた行為<sup>6)</sup>だと言える。

ここで着目したいことは、先ほどのSmや今回のNsは、カンファレンスのすべての言葉もしくは「知識や発話の断片」のすべてを清書(自分の意見)に取り入れているわけではないということである。Smは「自殺」や「ニート」、「プログラマー」の3つの候補から「自殺」という言葉を選択した。一方Nsが人の感情を必要とする仕事として挙げたのは、教師・カウンセラー・看護師・心理学者などではなく「接客」であった(これはや6.Ns「おもてなし」17.Ns「具体例は旅館」という自身の発話の影響もあると考えられる)。また、第2回カンファレンスの引用箇所以外でもロボットによる代替が困難な仕事として「映画の監督」「(水泳の)コーチ」が挙げられているが、これらも選択していない。つまり、「接客」以外の仕事は切り捨てた(不採用にした)のである。

ここで「選択」という観点から、カンファレンスの特徴を捉えておきたい。カンファレンスでは資料の内容を踏まえて複数の職業を発話していることが確認できる。発話の中で職業の名称を列挙したり、関連する職業を連想したりすることで、書く段階において複数の選択肢から選ぶことを可能とする。それは逆に選ばないという行為

も可能とするのである。つまり、カンファレンスは列挙や連想を通して書くことの選択肢を生み出す「場」と言う特徴がある。

カンファレンスの中から「知識や発話の断片」を選び取り、自身の意見として取り入れる行為は、自分の意見として使用する言葉や内容を「選択」する行為であると同時に選択しなかったものを捨て去る行為でもある。つまり、「書く行為」の過程でカンファレンスの内容を振り返りながら、深層に堆積し、表層に影響を与えている「知識や発話の断片」の中から、自分に必要な言葉か否かを常に「取捨選択」しながら書いていると言える。このことを図式化すると図3のようになる。

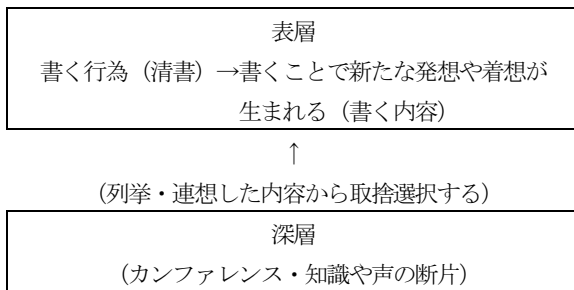


図3 列挙・連想から「書く内容」を選択する

## 5. 本稿のまとめと課題

本稿では、「カンファレンス」を通して「書く内容」が再構成される複数の類型を示した。もう一度、テキストの再構成へと展開するカンファレンスの特徴を確認しておきたい。一つ目は「批判的な考察を行う視点・態度」を用いながら話題を拡散させ、清書を書く段階で書き手の思いや考えに即して一つの方向に収斂させていくということ。二つ目は拡散した「知識や声の断片」を一つの方向に収斂することが新たな内容や発想を生み出す契機となるということ。三つ目は関連したり、連想できたりする内容を発話することで、書く内容を「選択する」ことを可能にするということが挙げられる。

また、カンファレンスを行うことで「当事者（の視点）」や「『読みの道筋』からの分岐」という学習者独自の思考活動が明確になったり、強化されたりすると言える。下書きの段階においても、「当事者（の視点）」を持っていたり、「『読みの道筋』からの分岐」は行われていたりすると思われるが、それらを前面に押し出し、「書く内容」に

反映させ、「書き手意識」を活性化させる過程こそがカンファレンスであると言えるだろう。

下書きを清書に書き直す行為はカンファレンスをその間に経ている以上、影響を受けていることは間違えない。また、深層に位置する「カンファレンス（知識や声の断片）」から「テキスト」（表層）への再構成という観点から述べると「複数の内容・要素による意見文形成」「新たな着想の契機」「『読みの道筋』からの分岐」「内容の取捨選択」の4つが挙げられる。

カンファレンスで堆積した「知識や声の断片」（深層）は、「書く行為」（表層）に常に影響を与え続けている。書き手は、「知識や声の断片」の中から言葉を取捨選択している。そして、「書く行為」を契機にして新たな着想が生まれ、「書く内容」の生成が促されるのである。そして「書く内容」を再構成する過程には書くことの意識化も同時に生じていると考えられる。この「書き手意識」の育成については改めて論じたい。

最後に付け加えたいことは、表層が深層へ与える影響である。「書く行為」によって生成された文章（「書く内容」）は、清書が完成した時点で「知識や声の断片」として深層に沈み、次のカンファレンスや「書く内容」の糧となるのではないだろうか。そしてそれらは常に文章化される（表出する）機会を待っているのである。さらに言えば、カンファレンス（深層）とテキスト（表層）の絶え間ない往還関係が「書き手意識」の確立に影響を与えていると考えられる。

## 注

- (1) 佐藤 (2015) p.117
- (2) 小林 他 (2018) p.68
- (3) 本稿で使用する「資料」は「実用的な文章」を指す語句として用いている。以下「資料」と称す。
- (4) 加藤 他(2021) p.4
- (5) カンファレンスの記録を以下に引用する。

129.On 人間が働いてたところにロボットが ロボットに人間がやってたことを任せることにより えー と 仕事に幅が 増える。 増えるが＝

130.Iy =うん

131.On えー全員が全員そううまくいくわけじゃな  
いか  
132.Iy うん うん  
131.On(続き) ら失業者らが増えてしまう問題点がある.  
132.Iy(続き) あー

(6) 奥泉 (2012), p.29

(7) 加藤 他(2021), p.3

(8) 山下 (1994) の平家物語の成立に関する「聞き手との交流の中で判断し選び抜いたところを語るように筆録者が文字に定着した」(p.82)との指摘に示唆を得た.

## 参考文献

奥泉香 (2012) 「視覚化する書記テキストの学習—批判的談話分析とデザイン概念を援用して—」『国語科教育』第 72 号, pp.25-32

加藤好広・小林一貴・益子典文(2021)「カンファレンスにおける書き手の視点の分岐」『岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究・教師教育研究』第 23 号, pp.1-10

木村正幹 (2006) 「作文カンファレンスの発話プロトコル法による構造分析—『作文検討会』の導入の試み—」『人文科教育研究』第 33 号, pp.45-56

木村正幹 (2008)『作文カンファレンスによる表現指導』溪水社

小林一貴・須本良夫・大西祐治・河村美都紀・金井健太郎・山田唯仁・加藤司・則竹真和 (2018) 「カンファレンスによる書き手意識の形成とメタ言語的理解：絵画を見ることによる創作の学習過程の分析を通して」『岐阜大学カリキュラム開発研究』vol.34 no.1, pp.61-69

小林一貴・多和田仁 (2017) 「言語的テキストと図表との相互関係に基づく書くことの学習の展開」『岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究・教師教育研究』第 19 号, pp.11-19

佐藤広子 (2015) 「カンファレンス」高木まさきら編『国語科重要用語事典』明治図書, p.117

土方洋一 (2000)『源氏物語のテキスト生成論』笠間書院  
山下宏明 (1994)『語りとしての平家物語』岩波書店(『平家物語』の成り立ち)新日本古典文学大系 44『平家物語 上』(1991)岩波書店